

## 上代における助詞モと希望表現の共起について

小池俊希

「雲だにも心あらかなも[雲谷裳情有南畝]」（万葉一 18）のように、上代における助詞モには、希望表現と共起する用法があることが知られている。工藤美紗子（1963）『『も』という助詞の意味』（『文学』31）など、助詞モと共起する表現を整理した研究では、希望表現との共起が指摘されるものの、それぞれの希望表現ごとの差異については言及されておらず、その分類は「希望表現」までに留まっている。そこで、本発表では、「実現可能性」という観点から希望表現を整理することで、①「それぞれの希望表現が有する実現可能性の高低と助詞モとの共起のしやすさとの関係」と、②「助詞モの機能における、希望表現と共起する助詞モの位置付け」の2点を明らかにする。

まず、実現可能性による希望表現の整理と、上代の希望表現と助詞モとの共起の調査により明らかにする点は、以下の2点である。①上代の希望表現は、「ヌカ(モ)」「ナム/ナモ」のように助詞モと共起しやすい希望表現と、「コソ」・「ナ」のように助詞モと共起しづらい希望表現とに大きく分かれる。②実現可能性の低い希望表現は助詞モと共起しやすく、それに反して、実現可能性の高い希望表現は助詞モと共起しづらい。

次に、希望表現と共起する助詞ハ・副助詞ダニと助詞モとの比較対照を行い、助詞モに反して、助詞ハ・副助詞ダニは、実現可能性の高い希望表現と共起する傾向にあることを確認する。助詞ハとの比較対照からは、同じく係助詞とされる助詞モと助詞ハの間にも、共起傾向に差異があることを確認する。そして、副助詞ダニとの比較対照からは、〈譲歩〉の用法を持つとされる助詞モと副助詞ダニとの間に共起傾向の差異があることから、希望表現と共起する助詞モの機能は、〈譲歩〉とは理解しがたいと考える。そして最後に、実現可能性の低い希望表現と共起することが助詞モのみに見られる特徴であることから、希望表現と共起する助詞モの機能は、終助詞モや「～モ～カ」を形成する助詞モが有する機能に関係づけられると指摘する。

## 平安時代古記録の複合動詞 ―後項動詞の補助動詞化に着目して― 柳原恵津子

本発表では、峰岸明や発表者による、平安古記録には古記録特有の複合動詞が多く見られるという指摘を足がかりとして、平安期の主要な古記録で使用された複合動詞を、主に後項動詞の複合動詞化という観点から概観したものである。本発表で明らかにするのは、以下の三点である。

1. 古記録、中古和文双方で複合動詞後項として多く現れる動詞の多くが、中古和文では補助動詞的な用法を持つが、同時代の古記録では本動詞に添った用法のみが認められる。例外として、院政期の『殿暦』、鎌倉期の『民経記』に「～置」の補助動詞的用法と解釈できる例が、和化の度合いの強い文体で書かれた『御堂関白記』に、「～行（ゆく）」の補助動詞的用法と本動詞用法との境界にあると思われる例が見受けられる。
2. 古記録では複合動詞の後項動詞として用いられるが、中古和文では頻出しない動詞（「一参」「一着（著）」「一送」「一行（おこなふ）」「一定、」など）を後項要素とする複合動詞群に、峰岸明が指摘した古記録特有の複合動詞が見受けられる。これらの語彙は、「語彙的複合動詞」のうちの「主題関係複合動詞」に相当すると考えられる。補助動詞化の進んだ後項要素をとる「アスペクト複合動詞」が主流であった和文とは異なる造語の仕組みで、古記録特有の複合動詞は作られていたと考えられる。
3. 古記録では複合動詞後項として用いられず、中古和文に頻出する動詞群の中には、「一はつ（果）」「一わたる（渡）」など、現代語では特定の複合動詞に痕跡として残るのみの動詞が多くみられる。古記録で本動詞として広く複合動詞の造語力を持たなかったことと、後世造語力を失っていくこととの間の関係の有無が検討されるべきだろう。

## 変体漢文の構文論的研究 ―受身文の旧主語表示を例に―

田中草大

本発表は、「変体漢文はどのようにして日本語文を書き表しているのか」という問題意識を前提とする。音声言語とは異なり書き言葉においては表記上の特徴や選択（＝表記体）が、書かれた結果の文章の特徴（＝文体）に影響を与える。中国語文式に日本語文を綴る変体漢文という表記体においてはこのことが殊に顕著であり、その影響は「構文」のレベルにまで及んでいる。しかし現状ではその実態（変体漢文という表記体とその構文に与える影響）は未解明の点が多く、事象ごとの記述が求められている段階である。

そこで本発表はその一環として、変体漢文における受身文が旧主語（動作主。Xガ Yニ Vサレル）をどのように表示しているかを解明することを目的とする。助詞の表記に制約のある変体漢文における当該事象の実態を探ることは、書き言葉における表記体と文体との関係を理解する上で有益と考えられる。

平安時代の文書を主たる対象として調査を行った。その結果、旧主語の表示形式は主に「～ノタメニ（為）」が行っていること（例：薬師堂為大風被吹倒<sub>レ</sub>）を確認した。「～ニ」の例もあるが、文脈に頼るものが多数派であり方式としては発達していない。併せて「～ノ…スルトコロナリ」（例：子細，皆万人所<sub>レ</sub>知也）が補助的な役割を担っている可能性を指摘した。なおノタメニは今昔物語集など中世和漢混淆文にも使用例があるが、変体漢文では無生物の旧主語にも使用できるなど、用法の上で異なる部分がある。

ノタメニは、変体漢文において助詞ニが表記しにくいという制約に対処するための代替的語法と捉えられるが、ニを問題なく表記可能な和漢混淆文でも用いられる。これは、制約に起因する語法が文体的特徴となったと見なし得る。またこの語法は近世・近代の文語文にも使用され、近代口語文にも例がある。（口語文形成にも繋がる）文語文の史的展開を理解する上で、変体漢文の語法を把握することが有益であると言える。

## 〈僅少〉を表す語彙の形成

山際彰

現代の〈僅少〉を表す表現には、(1a, 1b) のような語群がある (仁田義雄 1981 「数量に関する取りたて表現をめぐって—系列と統合からの文法記述の試み—」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院)。これらは、客観的事実である数量を「「小さい数量」として把握・評価する」ことを示すが、歴史的に見て比較的新しいものである。

(1a) 要旨は {A群 たかだか／たかが／せいぜい, B群 たった／ものの／ほんの} 200 字だろ。早く書け。

(1b) 要旨は 200 字しかない (ん) だろ。早く書け。

そこで、本発表では (1a) のような語群を、「せいぜい頑張れ」のように数量表現以外を修飾する際には〈限度〉や〈マイナス評価〉といった評価付けを表すが (安部朋世 2005 「セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析」『千葉大学教育学部研究紀要』53), 数量表現を後接させると〈僅少〉と解釈できる A 群と、体言 (主に数量表現) を修飾して専ら〈僅少〉を表す B 群からなる〈僅少〉を表す語彙とし、次の点を指摘する。

(I) 現代の〈僅少〉を表す語彙が形成されたのは近世～近代であり、それ以前には A 群は助詞類, B 群は主に「ただ」が当該の意味分野を担っていた。

(II) 上記の要因として, A 群は係助詞の体系の変化, B 群は「ただ」の語義縮小が関連している。

現代で〈僅少〉を表す表現である A 群や B 群, 助詞「しか」はいずれも近世～近代にかけて定着する (「たかだか」は上代が初出だが, 〈僅少〉の定着は当該期間)。その要因には, 係助詞の「語レベルで意味機能を分担するシステムから統語構造が意味機能を支えるシステムへ」という少ない語が複数の意味を担うという変化 (宮地朝子 2007 『日本語助詞シカに関わる構文構造的研一—文法史構築の一試論—』ひつじ書房), および多義語「ただ」の語義縮小 (山口堯二 2004 「「ただ」の意義分化」『京都語文』11) に伴い, その代替表現が要請されたことが想定されることを述べる。

## タシカニの語史 —〈譲歩〉用法の成立過程及びその要因—

清田朗裕

現代語の叙法副詞タシカニは、〈確認・同意〉用法と〈譲歩〉用法に大別される。本研究は、そのうち、〈譲歩〉用法の成立過程及びその要因を、文献資料を用い、その語史を記述しつつ明らかにするものである。

叙法副詞タシカニの〈譲歩〉用法は、(1)の基本構造をもつ。文献資料を調査すると、この構造は近世からみられた。

(1) ( X )。 タシカニ Y。 逆接表現 , Z。

- ・ X: Y の内容の根拠となる情報や内容 (非明示的な場合もある)
- ・ Y: Z と異なる (対立する) 内容
- ・ Z: 本来の主張・立場に関する内容 (X, Y, Z の説明は、調査結果から、帰納したもの)

用例を観察すると、Y には、「分かっている」という、話し手の話題に対する心情理解がみられ、一方、Z には、現実世界の内容が対置される形で現れていた。ここから、Y は、話し手の「主観的世界」に該当する内容が入り、Z には、「客観的世界」に該当する内容が入ると考える。そして、客観的世界の方が、より確実で、信用がおける、間違いのないものであることから、Z の部分が、主張・立場を表し、Y には、Z によって否定される、異なる内容が置かれることになる。話し手による主観的世界と現実の客観的世界の対置が、〈譲歩〉用法の理解において重要だと考える。

ところで、タシカニの〈譲歩〉用法は、ポライトネス理論における、ポジティブ・ストラテジー6「不一致を避ける」に該当すると思われる。森勇太 (2016) 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』(ひつじ書房) 等によれば、中世から近代にかけて、発話行為や配慮表現の言語形式が発達する時期と考えられ、相手との円滑なコミュニケーションを図るために、配慮を示す手段として、タシカニの〈譲歩〉用法も発達したと捉えることができる。

なお、タシカニの〈譲歩〉用法は、レポート・論文執筆上でも、重要な表現である。ポライトネス理論との関連を考えることで、さらに考究できると考える。

## 泣き方の表現に見られる性差 ―小説における日本語とロシア語の比較から― 宿利由希子, カリュジノワ・マリーナ

本研究は、一般的に女性性と結びつけられる「泣く」という行為 (Frey, W. H. II, and Langseth, M. 1985 *Crying: The Mystery of Tears*. Winston Pr [フレイ, W. H. II, & ランセス, M. (著) 石井清子 (1990 訳) 『涙一人はなぜ泣くのか』日本教文社。]) に着目し、日本語の泣き方の表現においても性別とのつながりが強く見られることを、ロシア語との比較を通して示すこと目的とする。調査では、ロシア文学『片恋』のロシア語原文版と日本語訳版、および日本文学『或る女』の日本語原文とロシア語訳版に使用されている泣き方の表現をすべて抜き出し、泣く主体の性別と使用される表現の関係を観察した。

その結果、泣き方の表現の種類の多寡について、日本語の方がロシア語に比べ泣き方の表現の種類が多いことがわかった。さらに泣き方の表現の人物汎用性について、以下の3点が明らかになった。(1) 日本語でもロシア語でも「泣く (плакать, plakat')」「涙 (слёзы, slyozy)」「涙ながらに (со слезами, so slezami)」は一般的な泣き方であり、主体の性別と関係なく使われる。(2) 日本語では特に女性の泣き方としてオノマトペが多用されるが、ロシア語では主体の性差と関係なく泣き方の状態やその激しさに違いが見られ、オノマトペはどちらの性にも使われない。(3) 「すすり泣く (всхлипывать, vshlipivat')」は日本語でもロシア語でも泣く主体が女性性に偏っており、両言語社会において女性に特化した行為と考えられている可能性が示されたが、日本語版において「涙ぐむ」が男性性に偏る一方、ロシア語版で男性性に偏る表現は見られなかった。(2) および(3) から、日本語の方が泣き方と性別との結びつきが強いことが示されたと言える。

## 「主観性」の文法的定義と直示中心

デロワ中村弥生

日本において早くから松下大三郎、時枝誠記、金田一春彦による「主観的表現」についての議論があったことは周知の通りであるが、一方で、「主観性」あるいは「主観的」という概念が漠然としていて術語として文法的な位置付けがなされていないといった理由から日本語研究においては批判されることも多い。このような現状を踏まえ、本発表では、話者とは異なる「直示中心 (deictic centre)」の概念を用いた「主観性表現」の文法的定義を提案する。日本語には、益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」(田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版)における「主観性述語」など意味素性として「主観性」という特性を持つと考えられる語が存在することから「主観性」が語の意味素性として定義できると考える。西尾寅弥 (1972) 「形容詞の意味・用法の記述的研究」(『国立国語研究所報告』44, 秀英出版) や Kuroda, S. (1973) “Where epistemology, style and grammar meet: A case study from the Japanese” (Kiparski, P. and Anderson, S. (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt) により主観性述語は経験主体を一人称に制限することが指摘された。この人称制限とよばれる文法的制約を、述語が [経験主体=直示中心] という意味素性を持つと言い換える。直示中心とは、直示表現の意味を決定する基準となる点である。すべての発話は、直示中心を備えており、それは発話場面に常に存在する唯一の要素である話者に初期設定されている。このような意味素性を用いて、主観性表現を「直示中心がパラメータに設定された意味素性を持ち、解釈に直示中心が介入する表現」と文法的に定義することが可能となる。また、この直示中心が環境により移動すると考え、複文構造や談話レベルにおいて人称制限が無化する現象などを直示中心の移動という概念を用いて分析する。さらに、これまで同様の現象を分析するのに多く用いられてきた視点という用語についてその問題点を指摘する。今後は直示中心とその移動によって分析可能な現象とそうでないものをより詳細に調査し、その理由やメカニズムを解明したい。

## 「1ミリもない」考 榎橋比早子

「1ミリも～ない」は否定文脈で使用される程度副詞である。「1ミリも譲らない」のように全否定する。主に読売新聞、朝日新聞を対象に、「1ミリも～ない」構文の成立過程と用法について明らかにする。得られた用例数は読売新聞 101 例、朝日新聞 149 例である。初出は朝日新聞 1985 年で、2000 年以降に用例が徐々に増え、2010 年代になってから多くみられるようになった。

インタビューや講演の発言など、会話文中に現れることが多い。使用する層を確認すると、政治家が最も多く、91 例、次いで芸能人 24 例、スポーツ選手 18 例である。一般人からの投書では、70 代以上、小学生など、年齢も幅広い。分野世代問わず広く浸透してきた表現である。

「1ミリもない」の用法については3つの特徴的なことがある。1つめは「1ミリ」が実質的意味を持つ例で、降水量をさす場合があげられる。「1ミリも降らなかった」は、降水量ゼロをさすうえ、全否定でもある。程度副詞化の契機になっていると考えられる。2つめは、コロケーションで「譲らない」「進まない」との結びつきが強いことである。これは「一步も譲らない」「一步も進まない」という従来の表現から移行であると考えられる。3つめは、「悔いは1ミリもない」のような形容詞と共起する例が出現したことである（2000 年以降）。基本的には動詞と共起するが、中でも思考動詞などと共起することを介して「1ミリもない」が成立したと考えられる。

ほかに長さの単位を使った表現としては、「1センチも」の例も少し存在している。「1ミリも」と用法は同じで、全否定である。「1ミリ」よりさらに小さい数値をさす例「1マイクロも」「0.1 ミリも」も出現している。程度副詞「1ミリも」は極度の表現として、長さの単位を使用した新しい表現で斬新であり、全否定を強調をしているものだと見えるだろう。

## テキストの結束性の記述 — 「辞書は新しいのがいい」構文の主題 X 名詞句に注目して— 石原佳弥子

本発表は語彙・統語的な要因によって維持されているテキストの結束性の記述を目指し、野田尚史(1996)『「は」と「が」』(くろしお出版)が「XはYがZ」構文の下位分類の1つとする「辞書は新しいのがいい」構文の〈選択型〉〈並列型〉の2つの型3つのタイプの用例を現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下「BCCWJ」と呼ぶ)より抽出し、この構文のX名詞句を中心に考察を行った。「辞書は新しいのがいい」構文では〈選択型〉〈並列型〉とも先行詞を持たない間接照応において庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』(くろしお出版)が統語的問題から必須項を持つ1項名詞と呼ぶ名詞を主題とし、その必須項をテキストの大きなtopicとすることによってテキストの結束性が維持されていることがわかった。その場合、述語はていねいさ、テンス、モダリティ(名詞文では判定詞も含む)などが表層に現れず言い切り形となっていた。また〈並列型〉ではこの1項名詞が主題となった文が連続して現れて大きなtopicの下で小さな情報を付加していた。清水佳子(1995)「「NPハ」と「 $\phi$ (NPハ)」」(『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版)は、属性叙述文は1文で完結性が高いので1つの主題の下に複数連文するには主題の省略や顕現だけでない手段が必要と指摘しているが、「辞書は新しいのがいい」構文〈並列型〉では間接照応にある1項名詞の主題Xが複数の属性叙述文の連文を可能としていることがわかった。

また、Xが前文脈に先行詞を持たず照応関係にもない「辞書は新しいのがいい」構文の用例が新書で見られた。この用例のX名詞句は福田嘉一郎(2016)「主題に現れうる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈」(『名詞類の文法』くろしお出版)が「任意」と呼ぶ、書き手自身が指示対象を特定する意思がない名詞句となっており不定の総称名詞と解釈するのが適当と考えられる。このような文はテキストの結束性を維持せず文脈の流れを一度遮断することで背景的知识を解説する文、つまり、脚本のト書きや論文の注釈のような役割を担っていると本発表では結論づけた。

## 広告における特異な引用表現についての一考察 久賀朝

本発表では、近年の広告で急速に用例が増えている、「おいしい！をあざやかに。」「疲れを減らしてできるを増やそう！」のような、用言の終止形が後ろに格助詞を伴った表現について、引用論の立場から考察するものである。島田泰子（2013）「広告表現等における〈終止形準体法〉について」（『叙説』40）では、これらの用法が古典語の連体形準体法との語史的連続性があるとして〈終止形準体法〉と名付けている。

これらの用法について、広告という位相における文字数上の制約などから、引用標識および引用動詞が欠損した特異な引用表現であると考え、「広告引用」と名付ける。この「広告引用」は、「所与とみなされる消費者の発話を、文中において名詞として取り込む、特異な引用表現である」と定義することができる。これにより、島田の〈終止形準体法〉では説明しきれなかった用例についても包括的に説明できるようになる。具体的には、①「知りたいを、科学する」のような、形容詞・動詞のどちらとも解釈できるもの、②「89%がうまい。（とアンケートで答えた）」のように、引用句が述語の位置に立っているもの、③「看護師の“はたらく”を応援！」のように規定成分を伴うもの、④「『これ、よく聴いたなあ。名曲だよね』が、いっぱい入ってる。」のような節以上の要素を含むもの、などである。また、テレビCMでの「ポーズ」という音声的特徴についても、引用という観点から説明できる。

「広告引用」という考え方を出発点として、文法論における「引用句の品詞性」という本質的な問題が明らかになった。また、最近では、ニュース記事の見出しなどに、引用句が形容動詞の語幹のようにになっている表現（「スーパーでもクレカな人」）や、複合語の構成要素となっている表現（「“ウイルスばらまいてやる”男」）が見られるようになってきているが、このような語・形態素レベルでの引用句の統語的機能という側面に関しても、本発表での考えを応用することで、さらに踏み込んだ分析が可能になると思われる。

## 可能構文における格交替の規則から見た「ニーヲ」パターンの制約

李娜

日本語の可能構文には、「ガーヲ」「ガーガ」「ニーガ」の3つの格パターンがあることがよく知られている。しかし、可能構文は属性を表すものが多いため、「ハ」で標示するのが一般的かつ自然である。すなわち、可能構文に現れる格交替は必須ではない。このような必須でない格標示の使用は理由があると思われる。また、従来不適切と扱われる「ニーヲ」パターンは、ある条件が満たされれば容認度が上がると考えられる。そこで、本発表はまず、可能構文における各格パターンの認可条件を確認した上で、格交替の規則を明らかにする。また、「ニーヲ」パターンの容認度が高まる条件について、説明することを試みる。

分析した結果、可能構文における格交替は恣意的ではなく、交替順序があることがわかった。具体的に「交替過程①ガーヲ」→「交替過程②ガーガ」→「交替過程③ニーガ」となる。そして、このような表面上の順序に関する規則は情報構造にも関わっている。交替過程②と交替過程③にある動作対象/場所を標示ガ格は伝達上の重心となるため、焦点と解釈されやすい。ニ格は、動作主に基づく基準にも解釈できるため、潜在的に対比の用法が生じており、ガ格に比べ、一種の弱い焦点となっている。すなわち、「ニーガ」パターンは、伝達上にある2つの焦点の拮抗作用によって成立している。交替過程③にあるガ格をさらにヲ格に戻すと、ニ格はガ格ほど強い焦点にならないため、不自然となる。このように、「ニーヲ」パターンは、交替順序に違反しており、構造上かつ情報上の欠落があるため、不適切となる。ただし、否定・疑問/複文など情報構造上の操作によって、容認度が上がると主張する。

## 「ていらっしゃる」と、その非敬語形 ベリナ・タイル

従来の研究（金水 2004 等）で「ていらっしゃる」という敬語には、3 種類の非敬語形動詞（「来る」「行く」「いる」）が元となっているものが存在していることが指摘されていることに基づき、「てくる・てゆく・ている」が敬語化し、「ていらっしゃる」になる場合について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ コーパス）を用いた調査を行った。調査の中で得たデータを Python で分析する中で、「ていらっしゃる」が「てくる」に解されることについては、単に動詞の接続だけでは説明がつかず、「ていらっしゃる」という状態動詞に結びついた形による特殊な制約があると考えられる。また、「いらっしゃる」と副詞の分析でアスペクトに関わる副詞の分布などからもその多様性を示すことが可能である。以上のように、移動動詞の持つ特殊な性格によって「ていらっしゃる」という状態性の敬語が作られることを、具体的な例から実証できた。

## 条件表現の連体修飾用法 —その意味解釈を中心に—

杜曉傑

接続助詞「ト・バ・タラ・ナラ」で表される条件表現は、一般的には条件を表す従属節と帰結を表す主節で成り立つとされているが、本稿は、条件表現が「バ・タラ・ナラ＋ノ＋主名詞」の形式で連体修飾に使用される現象に着目し、Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4:1-38 などが提唱した参照点構造を用い、その意味がどのように解釈されるかについて考察し、「条件節＋帰結節」という一般的な用法との関係についても論じる。

「朝日新聞記事データベース 聞く蔵Ⅱ」を使用して用例を集め、調査を行った。その結果、条件表現の連体修飾用法には、帰結の内容、またはその一部が主名詞で表現される「条件-帰結型」と、帰結の内容が言語化されず、読み手の言語知識または百科事典的な知識によって補完される「帰結潜在型」という2種類のも存在することがわかった。また、条件表現の連体修飾用法の意味解釈には、条件-帰結関係、そして修飾部と主名詞の意味関係という2つの関係を特定する必要がある。先行研究では、条件-帰結関係の特定には帰結節の復元が必要とされ、修飾部と主名詞の意味関係の特定には、その関係の分類が必要だとされているが、本発表は、その2つの関係はいずれも参照点構造によって説明できることを論証した。そのため、条件表現の連体修飾用法は、「条件節＋帰結節」という一般的な用法から派生したものではなく、それ自体に自立性を有するものだと主張した。

## 動名詞の名詞述語文「VN+だ」の意味用法をめぐって

石立珣

本稿では、連用的形式を受ける動名詞の名詞述語文「VN+ダ」を取り上げ、その意味用法に基づき、類型化を試み、次の5種に大別した。

- |                       |                                 |
|-----------------------|---------------------------------|
| ①予定表書き込み型の「VN+ダ」      | 例：明日は大学へ九時に <u>集合だ</u> 。        |
| ②予想としての条件―帰結型の「VN+ダ」  | 例：この問題が解決しなければ、私は <u>破滅</u> です。 |
| ③予想・予測事態の現場実現型の「VN+ダ」 | 例：たった今、船が港に <u>接岸</u> です。       |
| ④態度表明型の「VN+ダ」         | 例：私は、その説に <u>賛成</u> である。        |
| ⑤事態制御文型の「VN+ダ」        | 例：杉子とは <u>絶交</u> だ。             |

その上で、「VN+ダ」の成立条件をスクリプトとの関連から整理した。つまり、①スクリプトを駆動させる、②VNがスクリプト的に予想できる選択肢の一つである、という二つの条件が満たされれば、「VN+ダ」の使用が可能であると指摘した。さらに、「VN+ダ」は動作そのものではなく、概念の対応関係を表すものであり、対応としての扱いができた文脈に調整すれば、「VN+ダ」は言いやすくなるということについても指摘した。これはVNの名詞としての機能を示唆するものでもある。今後品詞性と意味との関係を検討していく手がかりにもなる。

## 動詞に含意されない副詞的表現の結果状態解釈の成立

難波 えみ

日本語の結果状態を表す副詞的表現を含む文は、大きく2つに分けられる。1つ目は、動詞が含意する結果状態が副詞的表現により具現したものである(皿を粉々に割る)。2つ目は、動詞に含意されない副詞的表現が、対象の結果状態として解釈できるものである(レモンをかわいく切る)。また、後者は、状態変化動詞でない動詞にも認められる(野菜を色よくゆでる)。本発表では、動詞に含意されない副詞的表現に、結果状態の解釈が成立する仕組みを検討した。

まず、結果状態解釈が成立する副詞的表現の3つの特徴を述べた。結果状態を表す副詞的表現は、①意味的な有標性が高く、②動作主の目的達成のための選択的な結果状態で、③動詞に含意される結果状態と同様に、客観性が高く知覚可能な結果状態である。次に、結果状態解釈が成立しうる動詞を述べた。動詞に含意されない結果状態は、状態変化動詞だけでなく、位置変化動詞とも成立する(庭に花を2列に植える)。また、作成動詞とも成立し、作成された具体物に現れている状態を述べる(敷物を丸く編む)。そして、活動動詞とも成立するが、料理に関する動詞に限られる(野菜をくたくたに煮込む)。

上記の観察より、状態変化動詞、作成動詞では、動詞に含意される知覚可能性が媒介となり、動詞の結果の含意が一時的に拡張し、動作主が選択した知覚可能な状態が一時的に動詞に組み込まれ、結果状態解釈が成立する。活動動詞では、対象の名詞に内在しうる知覚可能な性質が動作主により引き出され、アスペクト限定詞となる。そして、副詞的表現は、継続的な行為の限界点となるため、結果状態解釈が成立する。状態変化動詞、位置変化動詞では動詞の結果の含意が一時的に拡張するため、活動動詞では結果状態により行為が限界点を持つようになるため、意味的な有標性が高まることを述べた。

結果状態解釈の成立は、共起する語との関係で決定され、この点は、結果構文の非典型性の要因と言える。

## 現代日本語感動詞「あら」の音調と意味 謝霞

日本語感動詞は、同じ語でも、その使用場面の相違により、異なる使われ方をされることがある。小林隆・澤村美幸（2017）「感動詞の方言学」（『方言学の未来をひらく：オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房）は、感動詞には一つの基本的意味があり、それに様々な音調的操作によって何らかの意味が加えられ、それぞれが異なる意味で実現されると指摘している。しかし、従来の研究では、音声の特徴を視野に入れながら、感動詞の基本的意味と音調的操作が持つ意味を分けて述べているものは極めて少ない。本発表では、感動詞「あら」を取り上げ、その基本的意味と音調的操作が持つ感情的意味を明らかにする。

本発表は、まず、『BTSJ による話し言葉コーパス』『名大会話コーパス』『BCCWJ』を用いて、「あら」の用例を収集・分類した。すると、その用法は喜び用法・同情用法・残念用法・感心用法などの 11 類に分けられる。そして、それらの用法の代表例各 3 例、合計 33 例を東京内・中輪系式アクセント地域出身者の 10 人のインフォーマント（20 代女性）に、発表者と対話する形で発話（3 回繰り返す）してもらった。それらの音調を praat により分析し、音調の共通する用法を纏める。その上で、各音調に共通する意味、つまり、「あら」の基本的意味を分析し、また、それぞれの音調が担っている感情的意味を導き出した。

その結果、日本語感動詞「あら」は、「想定外の事態や情報を心の中で察知した際に、意外だったので、驚いている」という基本的意味を持つことが明らかになった。また、「あら」の持つ音調は 4 種類で、平坦調は、「不本意ながら、目の前の状況や情報を受け入れている」という意味、急上昇調は、「疑念を抱いて、目の前の状況や情報を受け入れられない」という意味、下降調は、「相手の考えを否定し、自分が異なる意見を持っている」という意味を表す。これに対して、山型調は、何らかの意味を付与する積極的な操作ではなく、無標の音調であると考えられる。

## 方言アクセントから再建される日琉祖語の 3 拍名詞類別語彙

大門知樹

祖語に再建される語アクセントの対立グループである類をめぐり、松森晶子 (2000) 「琉球の多型アクセント体系についての一考察：琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方」(『国語学』51-1) によれば、琉球祖語において 3 拍名詞は 4 類と 5 類がそれぞれ二つの型に分かれ、 $1 \cdot 2 / 4 \cdot 5 / 4 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 7$  という類の分裂と統合が起きているとされる。類別語彙には金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究：原理と方法』(塙書房) pp. 62-73 掲載の通称「金田一語類」が広く使われているが、金田一語類は 3 拍名詞において本土諸方言で対応の例外となる語が多い。一方で、上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」(『言語研究』130) では金田一語類の 5 類と 7 類が二つの類に分けられているが、それぞれの所属語彙は明らかでない。

本発表では、日本語諸方言の比較により、日本祖語に再建される 3 拍名詞の 1 類, 2 類, 4 類, 5a 類, 5b 類, 6 類, 7a 類, 7b 類の類別語彙を示し、それらを琉球語諸方言と比較した。その上で日本祖語の各類と琉球祖語に再建される A 類, B 類, C 類の対応関係を検討した結果、日本祖語の 4 類および 5a 類は基本的に琉球祖語の B 類と対応しており、C 類対応の語は例外的存在であることが分かった。また 2 類は、数詞+ツの構造を持つ語のみが所属しており、特殊な類であった。加えて、5b 類の 7 語のうち、6 語は琉球語諸方言には全く分布しないか少数の方言にしか分布せず、琉球祖語に 5b 類に対応する語群は再建されなかった。7a 類は 1 語「蚕」のみが琉球語諸方言でのアクセント型の対応が規則的だが、分節音の対応から琉球祖語よりも後の時代の借用語である可能性が高い。この結果から本発表では、5b 類と 7a 類は日琉祖語には存在しない類で、日琉祖語から日本祖語までの間に新たに発生した類であるという仮説を提示する。

## 階層によるラ行五段化の通方言的一般化 —九州方言を中心に—

### 宮岡大

本発表の目的は、九州方言における「ラ行五段化」について、階層を用いて通方言的な一般化を行うことである。九州方言では、母音語幹（上一段、上二段、下一段、下二段）動詞が、r 語幹（ラ行五段）動詞のような活用をみせることがある。本発表では、ラ行五段化に関与する変数として、(i) 動詞語幹の種類と (ii) 語形を作る接辞の種類に着目する。その上で、九州の 16 方言のデータを元に、ラ行五段化には方言間バリエーションがあることを示す。更に、このバリエーションについて前述の変数を用いて分析し、(1) (2) に示す規則性があることを示す。

(1) ラ行五段化に関与する動詞語幹の階層

- a. 語幹クラスの下上： 上一段・上二段 > 下一段・下二段
- b. 語幹モーラ数： 1 モーラ > 2 モーラ以上

(2) ラ行五段化に関与する接辞の階層

意志 (// -u//, // -joo//) > 否定非過去 (// -n//) > 命令 (// -e//) > 過去 (// -ta//)

(1) は、左からラ行五段化しやすい動詞語幹を示す。一方言において、ある語幹がラ行五段化するなら、それより左の語幹もラ行五段化する。(2) は、左からラ行五段化に関与しやすい接辞を示す。一方言において、ある接辞がラ行五段化に関与するなら、それより左の接辞もラ行五段化に関与する。

(1) (2) は、小林隆 (1995) 「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」(『東北大学文学部研究年報』45) や、黒木邦彦 (2019) 「動詞語幹交替より紐解く九州方言のラ行五段化」(窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵 (編) 『鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相』くろしお出版) の一般化では説明できないデータ (例えば大分県九重町方言; 糸井寛一 1964 「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要 人文・社会科学 A 集』2(4)) も説明可能である。

## 音韻論的角度からみた「オトトイ」と「オトツイ」

王峻磊

昨日の前の日と意味する和語は「オトトイ」と「オトツイ」という二つの語形を持っており、歴史上その間に位相差が存在していた。近世中期まで中央語における両語形の変化図式は、先行研究によって「オトツイ>オトトイ>オトトイ（上層）・オトツイ（下層）」とまとめられたものの、語形変化の原因、特に下層でオトツイが新たに出現した原因を究明することが期待されている。また、位相差の構造についてもさらに研究する余地がある。本発表は音韻論的角度から上述の所謂二回目の語形変化の原因並びに位相差発生の原因について考察した。

まず音声変化の角度から、下層におけるオトトイからオトツイへの語形変化は院政期から鎌倉時代までのある時期に音変化によって起こったのではないか、という仮説を立てた。本発表はその検証に重点を置き、観智院本『類聚名義抄』を中心とする平安・鎌倉時代の古辞書から次の14例を抜き出し、それぞれ分析した。

「禪」シタモーシタム	「歴草」ソフキーソホキ	「石檀」タモノキータムキ	「準准」ナズラフーナズラフ
「棺」ヒトギーヒツギ	「葎」ムグラーモグラ	「臍」モモギーモムキームムギ	「弓緒」ユトリーユツリ
「弱」ヨハシーユハシ	「暮」ユフバーヨフベ	「指」ユビーオヨビ	「針魚」ヨロドーヨロヅ
「劣」ワロシーワルシ	「牛膝」キノクヅチーキノコヅチ		

不完全な調査でありながら、二点の結論を得た。(1) 当時の日本語の音韻の実態として一部の語におけるオ段音とウ段音との交替が認められる。(2) 位相差はある種の発音の区別によって生じうる。それを踏まえて、下層部におけるオトトイからオトツイへの変化は音変化に求められるものであり、位相差はまさにその発音の区別によるものであるという結論に至った。本発表は語彙史の面のみならず、古辞書の和訓にみられるオ段音とウ段音との交替という現象についても報告し、今後の課題として提起した。

『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書について —漢語に注目して—  
姜盛文

本発表では『古言梯』以降成立した、古典仮名遣い系統の仮名遣書に収録されている漢語を中心に考察する。先行研究を参考にして『古言梯』以降の仮名遣書をまとめたところ、80 資料が見られた。まだ確認できていない 17 資料を除いた 63 資料を成立・刊行年で並べると文化年間以降から『古言梯』のように言葉を辞書のように列挙したものが多く出版されていることが確認できた。おそらく国学を学ぶ人が増加したことと関係があると考えられる。

『古言梯』以降の仮名遣書の中で 16 資料を取り上げて調査した結果、10 資料に漢語の項目が見られた。文化以降の資料から漢語項目数が増えており、字音の項目も設けられていることが明らかになった。また、『和字正濫鈔』『和字正濫要略』の漢語と比較した調査では文化以降の資料からこれらの資料に依存する傾向が弱まっていることが確認できた。これは文化の頃から漢語の目録として、また、仮名遣いの基準として『和字正濫鈔』や『和字正濫要略』以外の資料を参照するようになったことを意味するだろう。一方、資料によって仮名遣いが異なる語が見られた。これは宣長の説が仮名遣書に反映されるようになったためであると考えられる。

## 『日本語歴史コーパス 奈良時代編Ⅱ 宣命』の公開

呉寧真, 池田幸恵, 須永哲矢, 小木曾智信

本発表では、『日本語歴史コーパス 奈良時代編Ⅱ 宣命』の構築と公開について報告する。本コーパスは国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一つとして、2020年3月に短単位・長単位・多重形態論情報データコーパス検索アプリケーション「中納言」上で公開された。

本コーパスは『続日本紀』の宣命部分を収録している。奈良時代の歴史書『続日本紀』には62編の宣命があり、語数は約2万語である。和文資料の少ない上代において、和文体であり、一字一音の万葉仮名をも用いる宣命は極めて貴重な資料である。原文は漢字と万葉仮名が用いられているが、本コーパスの校訂本文では、北川和秀(1982)『続日本紀宣命一校本・総索引』をもとに、原文を読み下し、句読点を付与した漢字仮名交じり文を用いた。そのため、宣命書きに通じた宣命研究者だけではなく、専門外の研究者にも読みやすい。一方で、『日本語歴史コーパス 奈良時代編Ⅰ 万葉集』と同じく、「中納言」の検索画面では宣命書きの原文が「原文 KWIC」「原文文字列」に復元されるため、原表記が確認できる。

また、本コーパスの特徴として、難読の漢文熟語表記、地名と数詞に訓読と音読を同時に付与した。これは、掛詞や洒落などに対応するために本文の同一箇所複数の読み・形態論情報を付与できるようにした機能によるもので、『日本語歴史コーパス』の「八代集」や「洒落本」で用いられた。宣命は独特な読みが多く、従来他の資料と統合しにくいのが、本コーパスは訓読と音読を同時に付与することで、通時的な検索がしやすくなった。既に公開されている奈良時代編から明治・大正各時代編のサブコーパスを併せ活用することで、共時的、通時的な語学研究に貢献できることが期待される。

## 『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』の公開

片山久留美, 小木曾智信, 上野左絵

本発表では、2020年3月に国立国語研究所より公開された『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』の概要や特徴等を報告する。

本コーパスは近松門左衛門作の世話物浄瑠璃 24 作品をコーパス化したもので、およそ 25 万語の規模となる。『日本語歴史コーパス』の江戸時代編は、これまでⅠとして洒落本、Ⅱとして人情本のサブコーパスを公開してきた。今回江戸時代前期の資料であるⅢ近松浄瑠璃が加わったことで、室町時代末期から幕末期にかけての資料が、細い線ながらもつながることになる。

浄瑠璃の台本は、「語り物」としての性質上、地の文と登場人物の発話部分の境界が明示されないが、本コーパスではテキストを地の文と会話に大別し、会話箇所には性別や身分などの位相も含めた話者の情報を付与した。これにより、話者の位相差を用いる歴史社会言語学的な観点からの研究利用も可能となっている。

また、近松浄瑠璃の特徴の一つに、掛詞・物尽しなどの修辞技法が用いられていることが挙げられる。こうした修辞上の複数の読み（語）についても検索対象とすべく、本文の同一箇所に複数の意味を持たせているものについて形態論情報の多重化（複線化）を行った。インターネット上の検索アプリケーション「中納言」から容易に検索することができる。

江戸時代編のサブコーパスが質・量ともに拡充されたことで、サブコーパス間の比較対照なども可能となってきた。本発表では例として、江戸時代編の3つのサブコーパスのうち、近松浄瑠璃のみに現れる語にどのようなものが見られるかを紹介した。本コーパスの公開、また多重の形態論情報検索などの機能拡張が、今後の日本語史研究の一助となることを願う。

## 『日本語歴史コーパス』に対する文脈化単語埋め込み情報付与 浅原正幸, 加藤祥

単語を低次元の実数ベクトルで表現する技術である単語埋め込みの研究が工学分野で進められている。2018 年になり 文脈を考慮した文脈化単語埋め込み技術が開発された。文脈化単語埋め込みは、その出現ごとに異なるベクトルを割り当てるため、語義のあいまい性解消にも有効である。同技術の一つ BERT は、単語穴埋め課題と 2 文隣接課題を自然言語処理の事前学習モデルである。日本語では BERT の事前学習モデルとして『国語研日本語ウェブコーパス』を訓練データとした NWJC-BERT が整備された。このモデルは言語研究を目的として整備されており、UniDic-分類語彙表対応表『WLS2UniDic』に登録されている自立語と UniDic 中の全付属語を、UniDic の語彙素ベースで訓練したものである。これにより、『日本語歴史コーパス』を含めた UniDic 体系で整備されたコーパスに対し、ベクトル表現を悉皆付与できるようになった。しかしながら、BERT の事前学習モデルは、GPU などを搭載した機材を用いることが必要で、個人で利用することは困難である。そこで『日本語歴史コーパス』バージョン 2019.12 の一部に対して、文脈化単語埋め込み情報を付与した(以下『BERTed-CHJ』と呼ぶ)。さらに文単位の埋め込み情報も整備した。『日本語歴史コーパス』の単語単位の類似度だけでなく、文単位の類似度も評価できるようになった。

一方、『日本語歴史コーパス』の一部に対して『分類語彙表』の分類番号付与が人手により進められている(以下 CHJ-WLS2 と呼ぶ)。既に「竹取物語」「土左日記」「徒然草」「方丈記」の作業が完了している。以下では、文脈化単語埋め込みの有効性を検証するために CHJ-WLS2 の分類項目に認定される、現在(.1641 関係-時間-現在) 125 語・過去(.1642 関係-時間-過去) 79 語・未来(.1643 関係-時間-未来) 29 語、合わせて 233 語のベクトルを BERTed-CHJ から抽出し、可視化した。古典語の時間表現について、分布意味論の観点から多義語の語義の識別可能性を検討したので報告する。さらに文単位のベクトルにより評価した作品間類似度などの調査についても示す。

## 八代集の掛詞 一部立との関連において— 松崎安子

本発表は八代集における掛詞について、『日本語歴史コーパス 和歌集編』の掛詞情報を活用し、数量的、形態的な特徴を各和歌集の部立と関連づけ述べるものである。

**課題 1** 八代集が擁する 155 の部立における掛詞の割合を求め、その大小から部立の特徴を見出す。

**課題 1 の結果** 各部立の全掛詞数÷各部立の全収録歌の短単位数×1,000 の式で千分率として求めた。その結果、降順の上位を金葉集「連歌」、拾遺集・千載集・古今集の「物名」が占め、その他、古今集・後撰集・千載集の「誹諧歌」も上位にまとまって見られる。また、上位半数の1~78位に「恋」を含む部立が23見られ、一方、春夏秋冬を含む季節の部立は下位79~155位中に37と多かった。

**課題 2** 八代集の掛詞情報を言語単位で観察することで部立毎の特徴を見出す。

**課題 2 の結果** 掛詞がどのような主本文に当てられているのかを短単位レベルでみると3パターンある。そのパタンの割合の大小と部立を関連づければ次のようになる。

- ①主本文と掛詞が同音数で「1短単位:1短単位」のパタンの割合が大きいのは、季節の部立と拾遺集以降の「賀」の部立である。一方、「恋」の部立は小さい傾向にある。
- ②主本文の短単位の一部を掛詞に利用するパタンの割合が大きいのは、恋の部立と最初期の勅撰集の「賀」の部立である。一方、季節の部立は小さい傾向にある。
- ③本文の短単位の複数にまたがった（結合された）ところに掛詞が当てられている割合が大きいのは「物名」、「誹諧歌」の部立で、他の部立での割合は軒並み小さい。

## コーパスによる程度副詞イタクの使用実態の一考察 —通時的变化を注目して— 華迪聖

本発表では、『日本語歴史コーパス』及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）中納言』に基づき、程度副詞イタクの使用実態を通時的分析し、年月が経つにつれてその意味・用法の盛衰と変遷を報告する。上代語から現代語にかけて程度副詞イタクが用いられた例文を抽出し悉皆調査を行い、各時代における例文の用例数、共起語（修飾する動詞・形容詞または他の表現と呼応して用いられる定まった表現）、イタクの表記を整理した上で使用実態を考察した。その結果は以下の通りである。

程度副詞イタクの初出は調査の限りでは奈良時代の『古事記』である。

上代語から中世語まで『日本語歴史コーパス』に収録された全ての資料には程度副詞イタクの該当例が確認されるが、時代が下り、文語体から口語体へと文学の主流が変化する中で、近世語以降はイタクの出現率が大幅に低下する。また、イタクと共起する語彙は時代によって相違が見られる。各時代の共起語彙の上位群を確認すると、上代語から中世語までは自然現象に関わる「(風が) 吹く」「(雨が) 降る」「(夜が) 更ける」などの語彙が目立つが、その以降は激減する傾向にあり、現代語においてはそれらの表現は完全に消滅した。その代わりに、「気に入る」「傷つける」「感動する」「感激する」などのような感情に関連する表現と共起することが多い。さらに、上代語から中世語までイタクとの共起性が強い文法的表現は禁止を表す「な…そ」とイタクに上接する「いと」が確認される。尚、上代語から現代語にかけてイタクの表記の変化に関しては、上代語のイタクの表記は「痛」「甚」「疾」「多」「太」があり、「伊多久」という音写も見られる。その以降は日本語の音声的变化や文学背景の変化によってイタクの表記法も変わりつつあるが、現代語では主に「いたく」、または「痛く」のように表記が安定している。

## 中国語から意味のみを受け容れた畳語形漢語副詞の変化について

蔡嘉昱

日本語において、現代中国語では副詞として使用されていない漢語副詞が多い。そのうち、「散々」のような日本語において独自の変化を経た語がある一方、「点々」のような中国語から意味を受け容れた畳語形漢語副詞も存在する。

本発表は、畳語形漢語副詞のうち、中国語から意味を受け容れ、かつ現代中国語において副詞的用法を持たない語を調査対象に、中国語と日本語資料における用例を整理・比較することにより、意味・用法などの変化を観察し、中国語から意味のみを受け容れた畳語形漢語副詞の副詞的用法を獲得する過程を考察する。

竹内らの「現代辞書における副詞一覧」に基づき、各辞書を確認し、中国語から意味を受け容れた畳語形漢語副詞「点々」、「鬱々」、「戦々」、「茫々」を中心に分析する。

調査の結果、「点々」・「鬱々」・「戦々」について、中国語で衰退した副詞的用法を維持している。維持できる理由は、「点々」、「鬱々」、「戦々」が長い間に日本人が書いた漢詩文に残され、国語化されていないことである。

「茫々」は中国語から意味のみを受け容れた畳語形漢語副詞である。中国語に副詞的用法がない理由は、「茫」という字が動的状态を修飾しにくい点である。日本語において早い時期に日本語に溶け込んで、動態のものを修飾できるようになり、形容動詞から副詞的用法を獲得した。

## 変体仮名字形データベースの構築と公開

間淵洋子, 福井尚子

国立国語研究所では、人間文化研究機構の4機関が協同で実施している「異分野融合による「総合書物学」の構築」プロジェクトの一環として、近世後期の版本である『比翼連理花廻志満台』初編3巻、『春色梅児与美』初編3巻、計6巻分の平仮名延べ約30,000字に対して、変体仮名が収録されたUnicode10.0.0によるコーディングを行い、変体仮名字形のデータベースを構築した(異なり字体数135字)。本データベースは、Unicode10.0.0で規格化された変体仮名コードを実資料へまとめた形で適用した初の試みで、(1)変体仮名使用の計量的研究、(2)形態論情報を用いた変体仮名と言語単位との相関説明、(3)Unicode変体仮名の実用性検証、(4)変体仮名の字体機械認識正解データなど、日本語研究だけでなく情報学等周辺領域でも利活用可能な言語資源の開発を目的に設計・構築したものである。

凸版印刷株式会社と共同で開発を行った、字体認定データと『日本古典籍くずし字データセット』の字形画像データを組み合わせたデータベース閲覧ビューア(右図)は、平仮名・変体仮名を「音価」「字母」「Unicode字体」の三層により階層的に分類表示し、各Unicodeに対応する実資料の字形画像を一覧提示するものである。くずし字資料の原典画像と翻刻文字列とを対応させて表示する機能を持ち、字形画像との相互参照を実現している点に特長がある。本ビューアは、国立国語研究所サイトより無償公開するもので、変体仮名の学習支援など、教育分野での利活用も期待できる。



図 変体仮名字形データベースビューア

## ヲコト点図共有・比較システムの設計

堤智昭, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

本発表では、訓点資料研究を支援するためのコンピュータシステムについて、発表を行う。提案システムは、訓点研究の成果をインターネット上で研究成果の共有・検討ができるように研究環境を整備することを目的としている。今回は、訓点の一種であるヲコト点をまとめた資料であるヲコト点図を Web 上で比較・共有するための、ヲコト点図データベース・ヲコト点図共有システムを中心に議論する。

訓点研究にコンピュータを導入するという試みは近年の研究により進みつつあるが、一方で研究成果の公開や共有をするためのシステムはあまり検討されていない。例えば、ある訓点資料の研究成果としてヲコト点図が作られた場合、それを研究者同士で共有する場合は紙媒体、もしくはスキャンした電子画像で共有することになる。これでは人の目で見ると比較する方法がなく、数値化や特定の点の検索といった電子化していれば容易に可能なことが実現できない。

そこで我々は、これら訓点を電子化し、Web 上で検索・比較・共有するためのプラットフォームを実現するべくシステム開発を行った。本プラットフォームは、ヲコト点図データベースを中心としてそれと連携した応用的なシステムを実現できるようシステムを設計している。例えば、訓点資料の自動書き下しや、点図同士の比較を行う場合にヲコト点図データベースに搭載されたデータを用いてそれを実現する。今回はそれらシステム開発の中でも、ヲコト点図を Web 上で比較・共有するための、ヲコト点図データベースの拡張と、点図の共有・比較システムの実装について報告した。今回のシステム拡張・実現により、これまでにデータベース化してきた築島裕(2007)「訓点語彙集成<第1巻>、ヲコト点概要、汲古書院」記載の主要 26 点図以外の、他の研究者が作成したヲコト点図もシステム内で扱えるようになり、検索や比較機能が充実した。

## 外来語「アップ（する）」の語義と用法について —コーパスを用いた分析— 松本理美

本発表の目的は、多義語である外来語「アップ（する）」について、①語義と用法（サ変動詞用法・名詞用法）により使用頻度や文法的特徴が異なることを実証的に明らかにし、②その結果と各種辞典における記述を比較し、使用実態が辞典にどの程度反映されているかについて明らかにすることである。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて抽出した「アップ（する）」の用例 2,904 例を対象に、「アップ（する）」の語義、用法（サ変動詞用法・名詞用法）等のアノテーションを施した。また、サ変動詞用法「アップする」に対して、共起成分（格成分・副詞的成分）、文末形式などの文法的特徴について計量分析を行った。

その結果、語義や用法により使用頻度には偏りがあり、レジスターによる使用の偏りが顕著なものもみられた。サ変動詞用法は語義①「上げる・上がる」、語義⑤「アップロード」に偏って使用され、名詞用法は語義①、語義⑤、語義⑥「クローズアップ」に偏りながらも、語義③「髪を上でまとめる」や語義⑦「ウォーミングアップ」でも一定数の使用が認められた。更に詳しく見ると、語義①は空間移動の意味ではなく、ほとんどが量の増加、増大の意味で使用されていること、語義⑤は 90%以上がブログという限定された場面で選択的に使用されていることなどが明らかになった。これは、和語と外来語の親和性の高さと使用環境が、外来語定着の条件であることを示唆するものである。

また、文法的特徴において、幅広く使用される語義①と極めて限定的な意味を持つ語義⑤を比較すると、語義⑤のほうがガ格やヲ格の省略が多く、格成分の出現傾向にも差があることが明らかになった。

さらにこれらの使用実態が辞典の記述にどのように反映されているかについて 4 種類 10 点の辞典を調査したところ、語義①～語義⑦のすべての語義が記述され、語義によって用法が異なることなどを記述している辞書はなく、使用実態の反映が不十分であることが明らかになった。

## 近代日本語における無情物主語受身文 —翻訳小説中の訳出例を中心に—

仲村 怜

近代以降の日本語において、西洋諸言語の翻訳の影響を受け、それ以前に見られなかったタイプの無情物を主語に置いた受身文が用いられるようになることが、森岡健二(1999) (『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』明治書院)などで指摘されてきた。本発表では、この近代以降の無情物主語受身文の用法の拡大に注目し、当時の日本語に影響を与えたとされる、逐語訳ベースの翻訳作品の原文(起点テキスト)と訳文(目標テキスト)を対照し、後述する三つの研究課題について分析を行った。研究課題A: 訳出パターンについては、無情物主語受身文は大きく分けて、①構文一致で訳出するパターン、②構文不一致で自動詞化が行われるパターン、③構文不一致で他動詞化が行われるパターンのような三つの訳出パターンによって訳出されていたことが明らかとなった。また、研究課題B: 訳出パターン選択の要因については、構文一致/構文不一致のどちらの訳出においても、主語となる無情物の、有情物との距離が、そのまま受身文とするのか、主語に有情物を補った他動詞文とするのか、または動作性を背景化した自動詞文とするのか、といった訳出の選択に影響していたことが明らかとなった。研究課題C: 訳出パターンの通時的変遷については、明治20年代には一部の有情物に近い名詞を除くほぼ全ての無情物主語受身文が構文不一致で訳出されていたのに対し、明治30年代以降、徐々に構文一致での訳出が訳者の選択肢として用いられるようになること、さらに、構文一致で訳出される動詞には一定の傾向が見られることなどが明らかとなった。

## 「好きだ」の対象を示すヲ格と情報構造 —ノダ文に着目して—

池田尋斗

「好きだ」構文の対象を示す格助詞にはガとヲが用いられるが、このうちヲは特殊な環境下で容認されるとされてきた。「好きだ」構文のヲの容認性については、対象名詞の意味的特徴や節タイプの要因が取り上げられることが多いが、文の情報構造について問題にされることは少ない。一方で大江三郎(1973)「願望のタイの前でのヲとガの交替」(『文学研究』70)は、対象を示す格助詞としてガとヲが使用される表現の一つである願望表現(ヲがデフォルト)の情報構造に着目し、対象語のみが焦点化される環境ではガの容認度が上がることを指摘している。この現象はガが「総記」の機能を持つことによると考えられる。この現象をガがデフォルトである「好きだ」構文に当てはめると、(1)の仮説が成り立つ。

(1) 仮説: 「好きだ」構文では、対象語が焦点から外れる環境においてヲの容認度が上がる。

(1)の仮説を検証するにあたって、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で採集した用例の情報構造を、構文要素による認定方法、焦点タイプによる認定方法、文脈による認定方法の三つを用いて認定し、「対象語が焦点に含まれるもの」と「対象語が焦点から外れるもの」に分類した。その際、文の情報構造を網羅的に検証するために、野田春美(1997) (『の(だ)の機能』くろしお出版)が提示したスコープのノダを持つ用例に着目した。

調査の結果、ガは総用例40例中、対象語が焦点に含まれる情報構造が34例、焦点から外れる情報構造が6例と、いずれの情報構造でも使用されているのに対して、ヲは総用例8例のすべてが、対象語が焦点から外れる情報構造で使用されていた。以上から、対象語が焦点に含まれるかどうかガの容認度に影響を与えており、対象語が焦点から外れる環境においてヲの容認度が上がることを確認された。これは、ガが「総記」の解釈を受け得る格助詞であるため、焦点から外れる要素にガを用いることで「総記」の解釈を受けるのを避けるために、ヲが用いられるのだと考えられる。

## 丁寧形基調の文章における従属節の普通形述語の出現要因 —「から」節を例として— 鏡耀子

従属節の述語の文体は、基調の文体と統一されるとは限らず、基調が丁寧形の文章中であっても普通形になる場合がある。これまでの文法研究において、主節に対する従属度が高い場合に普通形になるということが指摘されてきたが、具体的にどのような場合に従属度が高くなるのかという点が不明瞭であった。また、文末の丁寧形と普通形の交替を扱ってきた文章・談話研究の視点も取り入れて検討すべきであると考え。そこで本発表では、丁寧形と普通形が同程度の割合で使われる「から」節を取り上げ、丁寧形基調の文章において「から」節の述語が普通形となっている例を調査し、それらがどのような例であり、なぜ普通形となっているのかについて検討した。

その結果、普通形述語が現れる例としては、次の9つのものが挙げられることが分かった。①「から」節が間接引用節内に生起している。②「から」節の直後に「だ」が生起する。③「から」節の直後に「こそ」が生起する。④「から」節の外側に「のだ」が生起する。⑤「から」節の述語がイ形容詞または助動詞「ない」である。⑥相手との距離を縮めることを縮めることを狙いとしている。⑦相手をぞんざいに扱っている。⑧言葉遣いが丁寧でない。⑨同一文章中に、主節が一時的に普通形にシフトしている文がある。そしてこれらの例においてなぜ普通形述語になるのかという点については、①から⑤は文法研究の観点から、⑥から⑨は文章・談話研究の観点から説明できる。本発表では前者を「統語論的側面」、後者を「語用論的側面」とする。従属節の述語の丁寧さの問題は、このように文法研究と文章・談話研究の交わるところに存在するため、その双方の視点から検討することが必要である。それによって、従属節の文体の有りようが分かるとともに、それぞれの研究領域に寄与するところがあると考え。

## 結論の述べ方の指導法についての試案 —「以上のことから」の機能に注目して—

櫻井芽衣子

日本語学的観点を踏まえ、接続表現「以上のことから」を用いた結論の述べ方を指導する際の試案を述べる。

「以上のことから」は、俵山雄司 (2007) 「「このように」の意味と用法——談話をまとめる機能に着目して——」(『日本語文法 7-2』) によって、前件から導かれた判断などを後件で述べる、まとめの接続表現とされる。伊藤光史 (2014) 「接続詞分類の上位概念: 「したがって」「つまり」「このように」を通した一考察」(『日本語・日本文化研究 24』大阪大学) は、接続詞「したがって」「つまり」はそれぞれ順接、換言という異なるラベルが付けられることが多いが、前件を前提として後件で判断を下すという共通性があるとする。伊藤 (2014) が述べる「判断」は、換言可能な多くの語句の中から当該表現を選択した、ということも含む。『現代日本語書き言葉均衡コーパス (以下 BCCWJ)』から採取した用例より、「以上のことから」もまた伊藤 (2014) が対象とする接続詞と同様に、順接 (日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 7』くろしお出版) では確定条件) も換言も表すことができ、前件を前提として後件で判断を述べるものであるといえる。

順接・換言を表すことができる「以上のことから」の機能に注目して、「以上のことから A ので B。」という結論の述べ方を提案する。A は前件を一般化した内容であり、B は A に起因する。A は換言、B は順接の用法によって述べられる事柄である。BCCWJ から得た用例にも、この形式でまとめられているものが見られた。前提となる前件を元に広く判断を述べるものであるという「以上のことから」の機能により、このような述べ方ができると考えられる。あらゆる文章においてこの形式で結論が述べられるわけではないが、前件を一般化して結論の前に述べることで、読み手にとって論理展開が掴みやすくなったり、書き手自身も記述の過不足や誤りに気付きやすくなったりするという利点を得られる。また、一般化という認識の枠組みは文章作成技術だけでなく読解力の向上にも繋がる可能性がある。

## 丁寧体過去形式「～ましたです」の動向 — 「国会会議録」過去 72 年分のデータから— 神作晋一

日本語の文末丁寧体形式には「～ます」「～です」の 2 形式があり、過去形式は「～ました/～でした/～かったです」となっているが、「具体的なケースについて、確かにそのような事件ありましたですね。」のように「～ましたです」となる言い方がある。これは通常規範的な形ではなく一般の言語研究でもあまり取り上げてはいないが、日本語の文末表現の変遷や日本語学習者の習得過程に現れている現象である。本研究では「～ましたです」について、話し言葉を考えるという意図で、「国会会議録検索システム」(<http://kokkai.ndl.go.jp/>、以下「国会会議録」)から抽出した用例(昭和・平成・令和の 72 年分)を用いて種々の条件(前後接語, 話題, 場面, 話者など)ごとの観点から使用実態について、調査・分析・考察することを目的としたものであり、以下のような知見を得た。

1. 「国会会議録」に出現する「～ましたです」は昭和 40～50 年代が平均で 200 例弱と一番多く、平成の期間も年間で平均 100 例くらいとなっているが、最近 10 年は減少傾向にある。
2. 前接語では、敬語や敬語相当に現れることが多いが、どの動詞や形式にも現れ、またその出現の割合は年代を通じてほぼ一定である。
3. 後接語では、終助詞、接続助詞などのつく例が多く、引用節に出ることは少ない。「よね」「かね」のような確認要求をする表現が増えていく一方、「終止」「がね」「から」などが減って、より丁寧な話し方になる傾向がある。

その他、同じ敬語でも尊敬語>丁寧語>謙譲語になること、同じ話者が繰り返している傾向であること、また同じ「です」が付く「～ませんです」と使用者が重なっていること、などがある。これらは「～ました」が多く使われているとそれだけでは十分でないと感じられるようになったため、さらに「～です」を付けるということ、あるいはとにかく「です」を付加しなければ丁寧ではないという意識があるということ、どちらも考えられる。

發話・理解労力の軽減に優先する體系の單純化 —市來・串木野方言の繼續相を資料に—  
黒木邦彦

本研究では、市來・串木野方言（以下「市串方言」）における繼續相の發話・理解労力と使用頻度・選擇嗜好とを解明し、體系變化の動機として體系の單純化が發話・理解労力の軽減に勝り得ることを示した。本研究に言ふ市串方言とは、鹿兒島縣の舊市來町ないし舊串木野市（現いちき串木野市）で言語形成期を過ぎた老年層の方言である。同方言は相に特徴を持ち、5種類もの繼續相を揃へてゐる。それ／＼の意味・用法は同一ではないが、重なるところも小さくない。とりわけ、動作動詞の進行はそのうちの4形式（以下「繼續相4種」）で表し得るのである。しかし、動作進行表現における繼續相4種の使用頻度や選擇嗜好は、今のところ定かではない。このことが解明されれば、類義形式の使い分けや體系變化の動機を研究するに良い資料と成らう。そこで、本研究ではまづ、繼續相4種の發話・理解に掛かる労力に注目し、動作進行表現において兩労力を抑へるには {-wor-} が最適であることを示す。(i) 拍數、音節數、音調語數に乏しい形式は發話労力を、(ii) 多義性に缺ける形式は理解労力を抑へると仮定すれば、發話・理解労力を最小化するものは、{-wor-} である。次いで、この豫想が實態に合つてゐるか否かを母語話者同士の談話で確認する。談話内の動作進行表現を見るに、同表現に最もよく用ゐられる繼續相は {-wor-} ではなく、{-tjor-} であつた。(i) 客體變化動詞語幹が {-kata} を、(ii) {omow-} が {-tjor-} を専ら選ぶといふ偏りは有るが、この結果は先の豫想に反する。{-tjor-} は繼續相4種のうち最も多義的であり、變化進行表現以外の靜態表現はこれひとつで賄ひ得る。靜態表現の大半を {-tjor-} で済ますといふ相體系の單純化が市串方言には認められるのである。以上のやうに、市串方言においては體系の單純化が發話・理解労力の軽減に優先してゐる。たゞし、發話・理解労力の軽減に起因する體系變化も他方では認められる。このやうに、體系變化の動機は一様ではなく、あひ反するもの同士すら認められる。したがつて、確率論の面から體系變化を説くにあつては、動機の變動に對應しうる確率模型が要る。

## 雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析

## — 『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』を用いて—

宇佐美まゆみ, 張未未

国立国語研究所『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』では、コーパス収録会話の半数を占める学生話者の母語場面と接触場面の同等の相手との初対面雑談、友人同士の雑談の全 155 会話を「コア会話」と名付けており、大量データの量的分析には「コア会話」を利用することを推奨している。本発表では、宇佐美 (2015) 『『総合的会話分析』の趣旨と方法—量的分析と質的分析の必然的融合—』(『日本語教育』162-0) の方法論に基づき、「コア会話」を利用した特徴分析の一例として、日常会話で頻繁に生じる「笑い」の使用傾向を分析した。グローバルの観点からは、宇佐美 (2020) 「基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版」(『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』) における笑いの文字化方法を生かし、笑いを話者の「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」に分けて、「コア会話」の中の母語場面と接触場面の初対面、友人同性同士の会話それぞれの笑いの使用傾向を定量的にまとめた。ローカルの観点からは、早川 (2000) による 3 類 8 種の笑いの分類に倣い、音声つきの母語話者と非母語話者の初対面 8 会話と友人 8 会話における笑いの機能的特徴を定性的に考察した。分析の結果、次の 3 点が明らかになった。①母語場面においては、女性は、初対面会話、友人会話のいずれにおいても同程度に笑うのに対して、男性は、友人との会話において、初対面の会話の 2 倍以上の割合で笑っている。②接触場面では、初対面会話、友人会話、男女を問わず、非母語話者のほうが母語話者より多く笑っており、会話を円滑に進めようとする努力が窺えた。③初対面会話、友人会話においては、母語話者、非母語話者ともに、笑いのタイプは、「A. 談話促進」、「B. 緊張緩和」、「C. 会話継続」の順に多かったが、「C. 会話継続」の笑いは、非母語話者が圧倒的に多かった。総合的に見て、接触場面においては、非母語話者の笑いのほうが多いことが明らかになった。

## 現代日本語の交感発話の分類に関する考察

肖潔

本発表は、現代日本語の交感発話の枠組み及びその段階性を明らかにするために、交感発話の分類を試みることを目的にしている。交感発話は、イギリスの人類学者マリノフスキーの造語—‘phatic communion’から発展した用語である。加藤(2004)『日本語語用論のしくみ』(研究社)は、交感発話の交感機能について、「情報内容の伝達よりも、安定的にやりとりできる状況を作ったり保持したりすることに重点のある言語行動が持っている作用を指す。交感機能が強い典型的な例はあいさつである」と述べている。従来、交感発話とえば、主にあいさつ言葉のように人間関係に貢献できる言語表現のことを指す。しかし、交感発話においても、交感性の強いものとそれほど強くないもの、言語形式の定型性が高いものと低いものがあると思われる。そのため、本発表は、現代日本語の自然会話を例に考察し、「典型的交感発話」「準交感発話」「疑似交感発話」という三種類に大別できると結論づけた。

まず、先行研究の記述に基づいて、交感機能を「社交性がある」「情報性が低い」「行為目的が弱い」という三つの基本的な特徴にまとめた。次は、この三つの特徴をもとにして、あいさつ言葉ならびにあいさつに用いられる表現を対象に考察した。その結果、交感性の強い例は紋切り型のあいさつ言葉であると明らかになり、これを典型的交感発話と定めた。続けて、あいさつの中によく現れる「感謝」「謝罪」のような発話は、交感性もあるが、発話の行為目的を含む表現であるため、交感発話に間接的に機用していると考えられる。本発表では、それらの発話を準交感発話と定めた。典型的交感発話と準交感発話は、主に交感性の強弱によって分けられるが、疑似交感発話と典型的交感発話は定型性の高低によって区別される。例としては、よくあいさつ言葉と近接して現れる「早起きだね」「お出かけですか」のような雑談の表現である。以上のように、今回は、交感発話の大分類を整理することに留まったが、今後はこの結果を踏まえた上で、より細かな条件に応じた分析に進んでいく必要がある。

## 「あ」系感動詞の意味用法について

姚瑤

日本語では、母音「あ」のみで構成される感動詞が豊富である。これらの感動詞は発音が同じであるものの、音調、音節数などの違いにより、様々な意味用法を持ち、それぞれに共通点と相違点があるので、語の認定が非常に困難である。本稿では、このような感動詞の類を「あ」系感動詞」と称し、それに属される個々の感動詞の意味用法を整理し、語の区分を行い、その中核的な用法と周辺的な用法を分別することを目的とする。その上、情報処理システムの観点から、「あ」系感動詞間の関連性を明らかにしようとする。

研究方法として、本稿では日本語日常会話コーパス（モニター公開版）を利用し、コーパスから「あ」系感動詞の例文を抽出し、文脈と音声の両方から分析考察を行った。

その結果、次のような結論が得られた。

- ①「あ」系感動詞は「あ」系感動詞は形式の違いと各意味用法の独立性の観点から、「気づき」の「あっ」、「呼びかけ」の「あっ」、「情報受容」の「ああ」、「躊躇い」の「ああ」、「感嘆」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」の六つの独立の語に区分することができる。それぞれの語に周辺の、派生的な用法がある。
- ②「呼びかけ」の「あっ」を除き、「気づき」の「あっ」、「躊躇い」の「ああ」、「情報受容」の「ああ」、「感嘆」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」はすべて情報処理システムに位置づけられ、それぞれ「情報遭遇」、「情報処理」、「情報受容」と「情報判断、評価」のプロセスに対応する。